令和５年１月３１日

学校だより

２月号

横浜市立美しが丘東小学校
学校長　　藤本　光子

ホームページ　http://www.edu.city.yokohama.jp/es/utsukusigaokahigashi/

清掃活動こそ

副校長　　二瓶　亜希子

令和５年も早１か月。１月下旬から寒さが一段と厳しくなったせいか、子どもたちの登校時の服装もネックウォーマーやニットキャップ、手袋など真冬の装いです。これほど寒くなると、水道の蛇口からは水しか出ない学校では、手洗いうがいにも少々の気合が必要で、特に掃除当番での水仕事のあとは、誰しも手がかじかんでしまうこと必須です。

児童による清掃活動は、長年実践され日本文化に深く浸透しています。最近では、日本で行われている清掃の時間を導入する海外の学校もあるようです。私はこの掃除の時間を授業の時間と同じ熱量で（教材研究のように）力を入れてきましたし、今でもこの清掃活動への取組の姿から、使っている場所をきれいにする目的以外の子どもたち一人ひとりのよさを見取ろうと思っています。

掃除はやり方を工夫すれば短時間で終わります。いかに無駄な時間をつくらないか。例えば教室の後ろ半分の床からほうき当番が掃除を始めたとします。ほうきが掃いたすぐあとを水拭き当番、その直後にぞうきんのから拭き当番。そのぞうきん当番全員が教室の後ろ半分３分の１か４分の１のスペースを拭き終えたら、すかさず机運び当番は、拭き終えたスペース分だけ一気に運ぶことができます。そしてその机を運び終えたことでできた前半分の床スペースは、もうほうき当番がはきはじめられる…といった具合です。ただしこの同時進行のシステムを理解したからといって簡単にできるわけではありません。子どもたち同士の声掛けが大切です。「ぞうきんさんどうぞ。」「もう机運べるよ。」「ほうきはもう前スペースもはけるよ。」などの声掛けを、集中して取り組んでいる子は行うことができるのです。

掃除に集中して取り組めない子の大半は、掃除のやり方がよくわからないことが原因ですが、ついついおしゃべりに夢中になったり、持ち場を離れてしまったりすることもときにはあります。それでも学校の掃除というものは大勢で行うため、数人が誠実に取り組まなくてもなんとなく終わってしまいがちです。しかし、だからこそ、です。一人くらい怠っても何事もなかったかのように終わってしまうこともあるけれども、そんな中でもきちんと自分の役割を果たそうとする子のすばらしさを見逃すまいと、授業時間と同様に一人ひとりをよく見取りたいと思う活動なのです。

スポーツの世界でも、日本人が使った場所を「もとより美しく」してから帰る姿は賞賛されてきたように、日本人は自分の手で清掃を行うことから、自分の使う場所を清潔に保とうとするモラルが身に付いているのかもしれません。また、手順を考えて物事を進める思考、声を掛け合い一つのことを他者とやり遂げる協調性、今の時期でいうと、自分が卒業したあとに、あるいは次の学年の人が同じ場所を使うからという他者を思いやる気持ちも育つのではないでしょうか。残り２か月、あらためて子どもたちの清掃活動に対する取組の姿からよさを見つけ、ほめていこうと思います。